

修士論文（要旨）

2010年1月

外国語学習者の学習環境と学習継続要因
—遠隔接触場面参加者の言語学習ヒストリーから—

指導 宮副ウォン裕子 教授

国際学研究科
言語教育専攻

208J4003

岩本尚希

目 次

第1章 序論	
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
1.3 先行研究	3
1.4 ことばの定義	7
第2章 大学における外国語学習	
2.1 日本の英語学習者の場合	8
2.2 米国の日本語学習者の場合	11
第3章 調査概要	
3.1 調査協力者	14
3.2 調査方法および内容	14
3.3 理論的枠組み	17
3.4 分析方法	18
第4章 言語学習ヒストリーの記述と分析	
4.1 調査結果	20
4.2 動機の変容をとらえる	20
4.3 学習環境について	31
第5章 活動終了時の学びの評価アンケートの記述と分析	
5.1 Facebookプロジェクトの効果	36
5.2 Facebookプロジェクトの限界と今後の課題	42
第6章 総合的考察	
6.1 学習継続要因と学習環境	45
6.2 遠隔接触が参加者の学習成果や成果に及ぼす影響	49
6.3 IT利用の外国語学習活動への提言	50
6.4 言語学習ヒストリー法について	51
第7章 本研究の結論と今後の課題	
7.1 結論	53
7.2 今後の課題	53
謝辞	
参考文献	
巻末資料	

【キーワード：外国語学習、学習環境、学習継続、動機、遠隔接触場面】

1. 研究の背景・目的・先行研究

学習者の多様化ということばが注目され始めて久しいが、その意味範疇は学習動機や学習環境へも及んでいる。海外に目を向けると、母語話者との接触場面が皆無に等しいような環境下においても学習者が存在している。一体どのような要因が、そのような学習者の学習を支える原動力となっているのだろうか。本研究は外国語環境下における日本語／英語の学習者を対象に、彼らの言語学習ヒストリーに注目し、そこから学習継続の実態とインターネットを利用した母語話者との交流の効果を調査した事例研究である。研究課題は、1) 外国語学習者の学習環境と学習の継続要因を探る、2) 遠隔接触が参加者の学習動機や成果に及ぼす影響を明らかにする、3) 言語の社会化を目指した IT 利用の外国語学習活動へ提言を行う、の 3 つである。分析・考察は、動機に着目して行う。先行研究として、①第二言語習得論、②動機、③IT 利用の外国語学習、④言語学習ヒストリー (Language Learning Histories、以下 LLHs)、⑤言語の社会化理論、の 5 項目を本研究の基盤として位置づける。

2. 調査概要

調査協力者は、米国在住の日本語学習者 36 名と英語学習者 15 名の計 51 名である。いずれの学習者も母語話者との接触場面が少ないことが特徴として挙げられる。協力者は全員大学に属し、2009 年 3 月から 5 月までインターネットを利用した遠隔接触場面に参加した。この期間中に「LLHs」「遠隔接触に関する評価シート」「フォローアップ・インタビュー (以下 FUI)」の調査協力を依頼し、全ての調査回答者である 14 名を分析対象者とした。分析・考察は、LLHs (Murphey *et. al.* 2004) と動機構成概念 (Shoib & Dörnyei 2004) を統合した作業枠組を用い、協力者の回答の中から動機構成概念の各項目に当てはまるものを抽出し当てはめていくという、照合アプローチを採用した。過程志向アプローチ (Dörnyei & Otto 1998、ドルニェイ 2005) も適宜利用し、動機の変容とその時の具体的な行動例の分析を試みた。

3. 調査結果

学習継続のための動機を高める諸要因として「学習支援者の存在」「自己効力感」「成功体験」「自律学習」が大変重要な役割を担っていることが明らかになった。学習環境については、学習リソースと教室内外のインターアクションの視点から分析・考察を試みたが、学習リソースについては大衆文化を好む姿勢が自律学習と密接な関係があること、さらにインターネットを中心としたメディアが積極的に利用されていることが明らかになった。教室内外のインターアクションに関しては、外国語学習環境の場合、NS との交流場面は限られてしまうが、本研究からは、母語話者や非母語話者を問わない目標言語話者といかに学習者本人が意味のある交渉場面を創出できるかが、外国語学習／習得の促進を考える際非常に重要であること、さらにインターアクションの積み重ねが、学習継続を考える上でも動機へ肯定的な効果を伴うことが実証された。

遠隔接触の効果については、「教室という壁の崩壊」「視野の拡大」「情意面への働き」「言

語の社会化の促進」という観点で多様な成果をもたらしたことが明らかになった。また、タンデム・ラーニングが「異文化リテラシー育成」の観点からも非常に有効的であることが実証されたため、今後はファシリテーター的な教師の役割も検討しつつ、IT利用の外国語学習の1つの手段として、タンデム・ラーニングを推進することが期待される。

調査結果から、第二言語習得研究においてLLHs法が優れた質的データ手法であることが明らかになった。今後は、LLHsの応用法について検討しつつも、データ手法として利用するだけでなく、教師・学習者だけではなく、クラスメートも含めた教室内全体での総合的な学習の手段としてLLHsを積極的に利用することも必要だろう。

4. 今後の課題

LLHsの効果的な活用方法の検討とその使用の推進が必要である。学習継続のための動機を高める諸要因に関しては、今後の追跡調査や、学習継続を断念した外国語学習者にも調査を行い、学習継続者に対する調査結果との総合的な考察を経て、継続要因を検討し、教育現場への応用方法を探求することが求められる。最後に、学習動機と大衆文化の深いつながりが明らかになったため、大衆文化と動機の関わりに焦点を当て、教育現場への応用方法を検討した研究に取り組んでいくことも課題として挙げられる。

参考文献

- アンダーソン, B (1997) 『想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行』 白石隆・白石さや (訳) NTT出版
- 梅田康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割 - 学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る - 」 『言語と文化』 第 12 巻 pp.59-77
- 久保田賢一 (2000) 『構成主義的パラダイムと学習環境デザイン』 関西大学出版部
- クラムシュ, C (2007) 「異文化リテラシーとコミュニケーション能力」 『変貌する言語教育 - 多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』 pp.2-25 くろしお出版
- 小柳かおる (2007) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』 スリーエーネットワーク
- 坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上京子・森山新 (2008) 『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』 スリーエーネットワーク
- 佐久間勝彦 (2002) 「海外に学ぶ日本語教育」 『日本語教育の新たな文脈』 pp.33-64 アルク
- 辻高明・西村昭治・野嶋栄一郎 (2007) 「日米間の遠隔共同授業における日本側学習者の英語学習への状況論的アプローチ」 『日本教育工学会論文誌 30(4)』 pp.397-407
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」 『世界の日本語教育』 第 7 号 pp.17-29
- ドルニエイ, Z (2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』 米山朝二・関昭典 (訳) 大修館書店
- J.V. ネウストプニー (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- 林さと子・小西 正恵・関 麻由美・池上 摩希子・島崎 美登里 (2006) 『第二言語学習と個別性 - ことばを学ぶ一人ひとりを理解する - 』 春風社
- 宮副ウォン裕子・吉村弓子 (2005) 「ヴァーチャル教室の「日本の社会・文化」にかかわる意見の調整 - 日港大学間の電子メール交換活動の実践から - 」 『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』 pp.281-292
- 村岡英裕 (2002) 「質問調査 インタビューとアンケート」 『言語研究の方法』 pp.125-133 くろしお出版
- 八島智子 (2008) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』 関西大学出版部
- 吉村弓子・宮副ウォン裕子 (2005) 「ヴァーチャル教室における日本語交流 - 電子メール交換授業のすすめ - 」 『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』 pp.172-181
- 李受香 (2003) 「第 2 言語および外国語としての日本語学習における動機づけの比較 - 韓国人日本語学習者を対象として - 」 『世界の日本語教育』 13 号 pp.75-92
- Murphey, T., Chen, J., & Chen, L. (2004). Learners' constructions of identities and imagined communities. *Learner's Stories*. Cambridge University Press. 83-100.
- Shoib, A. & Dörnyei, Z.(2004). Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. *Learner's Stories*. Cambridge University Press. 22-41.